



榊の芽が出てきたポット

少し前まで、東京のたいがいの家には神棚が江戸時代以来のならわしで鴨居に釣ってあって、榊立てに造り榊を供えた。榊の取り替えは地方によって風習をたがえようが、当地では1日と15日に新しくするので、花屋さんへ買いに子供がよく行かされた。神棚が日本家屋の減少と歩調を合わせるように家々から消え出すと、榊だつて花屋さんの店奥でひっそりかくれんぼ。もう、日々の暮らしから遠のき、忘れられているんだとおもうしかなかった。

ところが、「そんなことはございません」と言わんばかりに、榊を、それも嬉しいことに「純国産」でもって世の中にせつせと送り出している青年がいるというのだ。

その奇特な青年が、佐藤幸次さん34

歳であった。

榊の需要は、一般家庭用では下火かもしれないが、考えてみれば神前結婚式、神社での祈禱、初宮参り、七五三や神道葬儀、地鎮祭などで絶対の必需品だ。といつても花き業界での存在感は花々の賑わいに比べて地味に属するだろう。そこへあえて目を留め、ビジネスにしたとは快挙。目立たないところに潜んでいる「宝物」の掘り起こしこそがビジネスチャンスにつながる。1人の青年が示したことになる。

しかし、宝物を見出しても宝の持ち腐れにしない努力というか熱情の継続が必要で、佐藤青年もまた「榊のち」で十余年を踏んばった。

結果、昨年度の年商2300万円を稼ぎ出し、パートタイマーとはいえ13人のスタッフを雇用し、しかも荒れた里山を修復するという社会貢献もしているというのだから、あっぱれだ。

じつを言えば我が家においても神棚は極小サイズと相成り、榊立てさえ置けない体たらく。若い佐藤さんに「お宅たち世代がだらしがないから伝統もなし崩し」と叱られそうで、取材に赴く際はいささか緊張気味だった。

日に焼けた顔や腕に 屈託のない快活な笑顔

待合せは西武池袋線の飯能駅前、夏



中国産を国産に! 高校中退「榊王」の情熱

佐藤幸次さん (株式会社彩の榊代表取締役)

林えり子 作家

写真・田中まこと

につぼんの1000人の青年 72

神事や神棚で用いられ、日本の伝統を象徴する榊。しかし、国内に流通する榊の9割以上は中国産だ。そうした現状を変えようと、東京・青梅の青年が奮起。会社設立の翌日に東日本大震災が発生したが、この逆境をチャンスにと、東北の市場を開拓。高校中退といったハンデも、青年の熱情で乗り越える。

日がまぶしい広場に軽自動車が止まり、若者が降り立った。ポロシャツ姿、長靴に裾を入れたニッカボッカは泥で汚れている。日に焼けた鞆革のような顔や腕は、いままがた夏の野山を駆け巡ってきた感じだ。活きのいい明るさを放つ笑顔にはこちらの心中など頓着しない屈託のなさ、快活さがあった。

佐藤幸次さんは、埼玉県飯能市で生まれ育った。地元の小中高校へ通い、高校2年で中退する。勉強が好きになれなかったそうで、パイロットを夢見て英語は勉強するが、語学力だけではないかもしれない世界だと知って諦め、好きな音楽の道で生きようかと考える。1歳上のお兄さんのエレキギターで独習、友人とバンドをつくってボーカルも受け持つが仲間の評も芳しくなく、ミュージシャンも断念。

お父さんはバス運転手、お母さんは花屋を商う堅実な家庭にあって幸次少年は浮いていたらしいが、学歴云々を言われずに済んだ。

小魚は小さな水で泳げ、どこへでも首を突っ込める。学歴などを身に纏うと人間、どうしたって巨魚になり、見合った大海を探すことになる。その点、着飾る物がない身軽さは、小さな入江で自由闊達に遊泳できる。佐藤青年のサクセスストーリーの鍵はここにある。しかし、学校も行かずにぶらぶらし



左・天然造り榊。地域によって大きさが異なる 右・手作業で丁寧に造り榊を仕上げるスタッフ

ていても母が明かないということ、お母さんの花屋を手伝いはじめ、働き出して3年目にある出来事が起こる。近所の蕎麦屋の主人が「神棚の榊をくれ」と買いに来て、奥にあった在庫を手渡すと翌日、「なんだこの榊は。こんな榊を売りつけやがって……」怒鳴り込んできたのだ。

榊のほとんどが中国産だ。ビニールハウス栽培に1カ月の船便。ぎゅうぎゅうの箱詰め、燻蒸処理という農薬消毒を施す検疫後に輸入許可、波止場から市場、花屋に着く頃には葉に色艶はなく、ぼろぼろになりかけている。花屋は水洗いなどで何とか形を整えて店